

NCGM

Vol.17 PRESS



HIDEYO MIYAZAKI

病院長

宮崎 英世

今年の夏は例年以上に厳しい暑さが続き、全国で熱中症による救急搬送が相次ぎました。これから冬にかけては感染症の流行が懸念されますが、当院では早期対応に努めるとともに、診療と研究の強みを生かし、地域の皆さま、そして全国民の健康の実現に向け邁進してまいります。



MASAYUKI HOJO

副院長

放生 雅章

今号ではこちらの内容を皆様にお届けします。

- 01 | 医療の現場から：血液内科
- 02 | 医療を支えるプロたち：臨床検査技師
- 03 | クローズアップ！糖尿病看護認定看護師





高度な医療と誠実な診療で、
血液疾患に立ち向かう



AKIRA
HANGAISHI

血液内科診療科長 / 第一血液内科医長

半下石 明

チームで支える血液疾患の診療

国立国際医療センターの血液内科では、白血病や悪性リンパ腫、多発性骨髄腫など、造血器腫瘍をはじめとするさまざまな血液疾患の治療を行っています。血液内科領域では、薬物療法や移植医療の進歩により、以前よりも回復が見込まれるケースが増えています。

一方で、血液疾患に関する一般的な情報は少なく、患者さんやご家族の中には「白血病＝治らない病気」といった印象をお持ちの方もいらっしゃいます。当科では、まず正確な情報をお伝えし、治療に対する不安を少しでも軽減できるよう努めています。その上で、患者さんのご意思や生活背景を尊重しながら、共に治療方針を考える診療を大切にしています。

血液内科では、赤血球・白血球・血小板といった血液中の細胞に異常が生じる疾患をはじめ、血液の固まりやすさ(凝固)や溶けやすさ(線溶)、さらには免疫に関わる仕組みの異常に起因するさまざまな疾患を診療しています。代表的なものとしては、白血病、悪性リンパ腫、多発性骨髄腫といった造血器腫瘍があり、これらには抗がん剤を用いた化学療法を中心とした治療を行っています。病気の種類によっては、薬による治療だけで十分な効果が得られるケースもあります。

一方、薬物療法だけでは改善が難しい場合には、骨髄や臍帯血を使った造血幹細胞移植を検討します。また、免疫の異常によって起きる溶血性貧血や特発性血小板減少性紫斑病、すべての血球が減少する再生不良性貧血といった疾患には、ステロイドなどを用いた免疫抑制療法が有効です。再生不良性貧血のなかには、骨髄移植が適している場合もあります。



こうした多様な疾患に対応するため、当科では主治医に加え、診療科全体で治療方針を共有しながら診療にあたっています。治療開始前には血液専門医によるカンファレンスを実施し、身体的な状況はもちろん、生活背景や治療への希望、ご家族の支援体制や通院環境などもふまえて、治療方針を検討します。

さらに、看護師、薬剤師、心理士、理学療法士など多職種が連携し、一人ひとりの患者さんに応じた治療とケアを提供しています。たとえば、白血病では年齢や体力に応じて抗がん剤の強度を調整したり、悪性リンパ腫では放射線療法を併用するなど、病状に応じて柔軟に対応しています。

国際的な拠点病院として、高度な血液疾患の治療を提供

国立国際医療センターは、感染症や国際医療の拠点として、あらゆる診療科と緊密に連携できる総合病院です。血液内科も例外ではなく、当センター内でさまざまな合併症への迅速な対応が可能です。当院にはHIV診療の専門部署もあり、HIVに関連する悪性リンパ腫の患者さんに対しても、関係部署と連携して診療を行っています。

当科には、移植施設で経験を積んだ医師が多く在籍し、造血幹細胞移植にも積極的に取り組んでいます。たとえば、HLA（ヒト白血球抗原）の型が半分一致する「半合致移植」に対応しており、親子間での移植も選択肢の一つとなっています。また、これまで治療が難しかった高齢の患者さんに対しても、個別に状況を評価しながら移植を実施しています。

患者さんやご家族に寄り添い、安心して治療に臨める環境を

血液疾患は、日常で触れる機会が少ない分、病名を聞いただけで大きな不安を感じる患者さんやご家族が少なくありません。とくに白血病や再生不良性貧血は、ドラマや映画などで「治らない病気」として描かれることもあり、深刻に受け止められることが多いようです。

しかし実際には、治療法の進歩により、多くの疾患で良好な治療成績が得られるようになってきました。たとえば、かつては骨髄移植が必要だった慢性骨髄性白血病も、現在は飲み薬でコントロールできるようになり、命にかかわるケースは大幅に減少しています。



難治性の疾患であっても、適切な治療を選択することで、血圧や糖尿病のように長く付き合いつつながら生活を続けることができる時代になっています。

当科では、患者さんやご家族が抱くイメージと実際の医療とのギャップを丁寧に埋めていけるよう、正確でわかりやすい情報提供を心がけています。病気の性質や治療方法を理解していただくことで、不安が和らぎ、前向きに治療に臨んでいただける一助になればと思います。疾患によっては精神的なサポートが必要となることもあり、当院では心理士と連携しながらご本人はもちろんご家族への支援にも力を入れています。

セカンドオピニオンのご相談も受け付けていますので、ご希望の方は医療連携室までお気軽にお問い合わせください。





検査から医療を支える。 臨床検査技師の誇りと挑戦

TOSHIO KITAZAWA

中央検査部門 臨床検査技師長

北沢 敏男

臨床検査技師の活躍の場は多岐にわたり、それぞれの検査分野で高度な専門性を発揮しています。そうした中で、検査室の在り方を常に見直し、病院全体の円滑な運営に目を向ける北沢敏男臨床検査技師長に、日々の取り組みや想いについてお話を伺いました。

検体検査・生理機能検査を専門体制で実施

臨床検査には大きく分けて2つの種類があります。ひとつは「検体検査」といって、患者さんから採取した血液や尿、便などを調べる検査です。もうひとつは「生理機能検査」と呼ばれるもので、心電図や超音波検査など、体の機能や働きを調べる検査です。

当院では、これらの検査を専門の検査室ごとに分けて、臨床検査技師が対応しています。たとえば、外来採血室では、診察前の採血や尿・便の提出を受け付けています。血液検査室では、赤血球や白血球などの血液成分を調べたり、血液の固まりやすさを評価したりしています。生化学検査室では、血液や尿から肝機能、腎機能、血糖値、コレステロールなどの項目を詳しく調べます。免疫検査室は、感染症や腫瘍マーカー、血中ホルモンについて検査しています。

また、微生物検査室は感染症の原因となる病原体の特定や、治療に適した抗生剤を調べる部門です。新型コロナウイルス感染症で話題になったPCR検査といった遺伝子検査のほか、食中毒や細菌感染症で必要な細菌検査、結核菌をはじめとする病原体の検査を行っています。

特殊な部門としては、内視鏡や手術で採取した組織を詳しく調べる病理検査室、安全な輸血のための準備を行う輸血検査室も、それぞれの専門性を活かして運営されています。

一方、生理検査室では、心電図や超音波検査、呼吸機能検査など、患者さんの体に直接触れて行う検査を行っています。

どの検査も、正確な診断や適切な治療に欠かせない大切なプロセスです。私たち臨床検査技師は、皆さまの健康を支えるために、日々専門性を高めながら検査に取り組んでいます。

幅広く活躍する臨床検査技師

多くの患者さんにとって臨床検査への入り口は、外来採血室での採血かもしれません。採取された血液は、機械によって基本的な検査が行われ、必要に応じて顕微鏡を使った詳しいチェック（形態学的検査）も行われます。形態学的検査では、血液や尿をスライドグラス上で染色標本にして、顕微鏡で見て調べます。血液検査や尿検査では、わずかな変化がとて重要であるため、検査機器の状態や測定精度を常に確認し、正確な結果をお届けできるよう心がけています。

また最近では、臨床検査技師も患者さんと直接関わる場面が増えてきています。たとえば糖尿病の治療では、血糖の変化を詳しく把握することがとても大切です。

当院では、糖尿病内分泌代謝科と連携して、持続血糖測定器（CGM）のデータをお渡しする業務なども行っています。糖尿病教室では、検査の役割について患者さんに直接お話しする機会もあります。

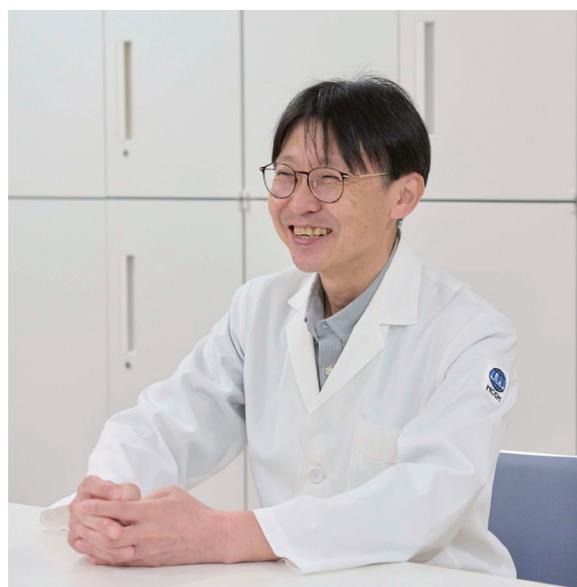
さらに治験では、治験コーディネーター（CRC）として臨床検査技師が説明を担当することもあります。治験に参加される患者さんが安心して臨めるよう、丁寧な説明を心がけるとともに、臨床検査技師として採血検体などの正しい取り扱いに注力しています。

院内感染の予防にも、臨床検査技師は関わっています。感染対策チーム（ICT）の一員として、患者さんから見つけた菌を分析し、感染の経路や広がりを調べるなど、医療スタッフと連携して対応しています。

繊細な技術で診断を支える

私は臨床検査技師として、「病理検査」という分野を専門にしてきました。病理検査では、手術で取り出された臓器などをもとに、病理診断のための標本を作ります。医師の確認を経て、臓器を保存処理し、その後、診断に必要な部分を切り出して、顕微鏡で観察できるように、スライドグラス上に染色標本として整えます。この作業はとても繊細で、技師の技が求められる仕事です。標本は、病理医が診断しやすいように整理・管理するところまでが私たちの役割です。また、痰や子宮頸部の細胞を調べる細胞診も重要な検査です。臨床検査技師は、標本を作るだけでなく、顕微鏡で観察して、がん細胞などの異常細胞がないかを確認し、結果を記録して医師に報告します。この分野には細胞検査士という専門資格もあります。

さらに、亡くなられた方の病態や死因を検証する病理解剖のサポートも、臨床検査技師の大切な仕事のひとつです。まさに、最後の検査として医療に貢献する役割を担っています。



患者さんに寄り添い、正確でやさしい検査を目指して

特に大切にしているのが、「患者さんと医師の両方に安心していただける検査室」であることです。検査の質はもちろん、運営のあり方にも経営的な視点を持ち、信頼される体制づくりに努めています。

当院の中央検査部門では、国際規格である「ISO15189」に基づいて、正確で迅速な検査結果を提供できるよう取り組んでいます。地域の医療機関からご紹介いただいた患者さんにも、安心して治療を受けていただけるよう、検査の分野からしっかりと支えてまいります。

検査にあたるスタッフは、専門的な知識と技術を持つ臨床検査技師です。臨床検査の入り口である「採血」は、どうしても痛みを伴いますが、患者さんの気持ちに寄り添いながらも、少しでも負担を減らせるよう、日々研鑽を重ねています。気になることやご意見があれば、どうぞ遠慮なくお聞かせください。皆さんの声を大切にしながら、よりやさしく信頼される検査室を目指してまいります。



糖尿病とともに生きる 患者さんを支えたい

認定資格を活かした丁寧な看護を

ERIKA SAKANAYA

看護部 副看護師長
糖尿病看護認定看護師 / 日本糖尿病療養指導士

肴屋 絵里香

肴屋絵里香 副看護師長は、糖尿病看護認定看護師・日本糖尿病療養指導士として糖尿病の患者さんに寄り添いながら支援し、正しい知識を伝える情報発信にも力を入れています。チーム医療の一員として先進医療の提供に貢献し、患者さんが夢をかなえる力になりたいと語る肴屋副看護師長にお話を伺いました。

専門の資格を活かし、 糖尿病患者さんの生活と心に寄り添う

糖尿病看護認定看護師および日本糖尿病療養指導士として、患者さんのQOL向上を目指すサポートを行っています。糖尿病看護認定看護師は、糖尿病患者さんに対する看護の実践、指導、相談を専門とする資格です。また日本糖尿病療養指導士は、糖尿病患者さんのセルフケアを支える専門の資格で、糖尿病の療養全般に対し正しい知識と介入スキルをもって対応する役割を担います。いずれの資格も、患者さんの思いに寄り添いながらその人らしく日常を送れるよう支援する姿勢を大切にしています。

糖尿病看護認定看護師の専門性が特に発揮されるのが、合併症を予防するための「フットケア」です。糖尿病による高血糖状態が神経障害や血流低下を招き、足の小さな傷が重症化しやすく、感染や切断といったリスクにつながることもあります。そのため、患者さんと一緒に日々の足の観察を行い、清潔に保つための指導や、安全な爪切りなど、患者さん自身が継続できるケアの支援を行います。

糖尿病の患者さんへの支援は、自己管理の相談を受けて一緒に考えていく点が特徴的です。看護師として、患者さんの病気に対する受け止め方や、指導した内容をどのくらい獲得できているかを確認する場面で、専門性が活かされていると感じます。

不安や誤解をやわらげ、 安心して療養を続けるために

糖尿病の患者さんは、病気とともに歩みながら、長く通院を続けていく必要があります。そのなかで、病気をなかなか受け入れられず、通院をやめてしまう状況は医療者として何としても避けたいことです。私たちは患者さんの言葉一つひとつに耳を傾け、まっすぐ向き合いながら、継続して通院しようと思っただけのような関わりを大切にしています。

また、誤った情報にもとづいて、根拠のない食事療法や運動、薬物療法に頼ってしまうと、かえって病気が悪化してしまうこともあります。患者さんやご家族に正しい医療情報を届けることにも日々取り組んでいます。糖尿病の療養を支えるうえで、医学的な知識はもちろん欠かせませんが、何より大切なのは、一人ひとりの患者さんの気持ちを大事にする姿勢だと感じています。これまで歩んできた生活や、これからの人生を尊重しながら、丁寧に寄り添うことを心がけています。

チーム医療の一員として、情報の架け橋に

看護師はベッドサイドで最も長く患者さんと接し、患者さんの状態やお気持ちを他職種と共有する「橋渡し」の役割を担っています。看護師は、患者さんを支援する立場として伺った情報や思いに加えて、治療の実際の状態を多職種に伝えています。例えば、インスリン注射や退院後の様子を伺い、患者さんが安心して治療が受けられるように、治療計画の立案に反映させています。

糖尿病と向き合う家族の経験から、糖尿病看護の道へ

私が看護師を目指すきっかけとなったのは、小学生の頃に祖母が2型糖尿病と診断されたことでした。当時から「糖尿病になると食事に気をつけなければいけない」ことを

子どもながらに理解し、祖母の透析治療が始まると一緒に出かけられなくなり、病氣と向き合う祖母のつらさも感じていました。

その経験が「将来は患者さんにいちばん近い存在として支えられる看護師になりたい」と思う原点になりました。糖尿病に対してマイナスのイメージを持つ患者さんやご家族が少しでも前向きになれるように、合併症で苦しむ方を少しでも減らせるように。そんな想いを胸に、学生時代からずっと糖尿病の分野で働きたいと考えてきました。今、そうした願いを叶えながら日々患者さんと向き合っていることに、感謝の気持ちでいっぱいです。

私は病棟勤務なので、退院後の患者さんと関わる機会は多くありませんが、ときどき外来でお会いして「就職しました」「結婚しました」と報告をいただく、とても嬉しくなります。1型糖尿病の患者さんが無事に出産され、赤ちゃんを抱っこさせてもらったときの感動は、今でも忘れられません。



患者さんの夢をかなえる力に

糖尿病は長くつき合っていく必要のある病気です。患者さんやご家族が「糖尿病のせいで夢を諦めた」と感じるのではないよう、私たちは患者さんの想いを受け止め、寄り添いながらその実現を支えていきたいと考えています。

今は、インターネットなど多くの情報が手に入る一方で、正しい医療情報を見分けるのが難しい時代です。私たち医療者が信頼される情報発信を担い、迷ったときに相談できる存在であることが求められていると感じています。糖尿病について不安や疑問があるときは、どうか一人で悩まず、私たちに相談ください。

地域と協力して糖尿病患者さんを支えたい

地域の医療機関の先生方と力を合わせながら、患者さんを支えていけたら嬉しく思います。特に、働き盛りの患者さんにとっては、平日の日に当院を受診することが難しく、身近なクリニックを利用されることも多いかと思えます。そうした方々を無理なく支えるためにも、紹介や逆紹介を通じた連携を大切にしながら、地域医療に貢献していきたいと考えています。

地域の皆さまと共に、これからも患者さんの人生に寄り添う医療を提供してまいります。



人間ドックセンターのご案内



長い歴史をもつ当人間ドックセンターは、その歴史と経験に基づき、お客様からの安心と信頼をいただいております。その期待にお応えできるよう全スタッフが心を込めてお迎えしております。施設内は広めのフロアでゆったりとしており、スムーズに検査を受けていただけることはもちろん、病院の専門診療科とも常に連携を取っており、ご病気が発見された際には、迅速に専門診療科へご紹介しております。また当院の特徴として、胃と大腸の内視鏡検査が同日に行えるコースや専門診療科とタイアップしたコース、PET-CT検査などの様々なオプション検査をご用意しており、皆さまの生活習慣や既往歴などに合わせて、ご自分でご自由にお選びいただけます。日帰りコースだけではなく、ご宿泊コースもご用意しており、お部屋からの夜景やお食事を楽しみながら、時間にゆとりをもって検査をお受けいただけます。

医学研究の発展と優れた人材の育成のために

当センターは、センター病院・国府台病院という2つの診療拠点に加え、研究所・臨床研究センター・国際医療協力局および国立看護大学校を擁し、高度総合医療を提供するとともに、特に感染症免疫疾患ならびに糖尿病・代謝性疾患に関する研究・診療を推進し、これらの疾患や医療の分野における国際協力に関する調査研究および人材育成を総合的に展開しております。当センターの活動を推進し、使命を十分に果たすためには、その活動財源を安定的・多面的に確保することが必要不可欠です。課せられたミッションを実現して国民の皆さまに成果を還元するための財源に関して、企業や個人の皆さまからの寄附によるご支援をお願いいたします。

何卒、当センターの寄附の趣旨にご理解頂き、お力添えを賜りますようお願い申し上げます。

患者支援アプリ導入のご案内

3月26日より、患者支援アプリ「Wellcne (ウェルコネ)」を導入しております。お手持ちのスマートフォンにインストールし、登録のお手続きをいただくことで、診察待ちの状況や、外来の予約の確認などができるようになります。

- ✓ 診察待ち順案内が届きます
- ✓ 受診予約が確認できます
- ✓ 医療情報の確認が可能となります。
- ✓ アプリ決済(後払い会計)が可能
- ✓ 院外処方箋の送信が可能です。



国立健康危機管理研究機構 国立国際医療センター

〒162-8655 東京都新宿区戸山1-21-1
TEL 03-3202-7181 <https://www.hosp.jihs.go.jp/index.html>



地下鉄を利用の方

都営地下鉄 大江戸線 若松河田駅(河田口)から徒歩5分
東京メトロ 東西線 早稲田駅(2番出口)から徒歩15分

都営バスをご利用の方

新宿駅から(宿74系統) 医療センター経由女子医大行き
「国立国際医療研究センター前」下車 徒歩0分
大久保・新大久保から(橋63系統) 新橋行き
「国立国際医療研究センター前」下車 徒歩0分
市ヶ谷・新橋から(橋63系統) 小滝橋車庫行き
「国立国際医療研究センター前」下車 徒歩0分
都営飯田橋駅前(C1またはC3)から(飯62系統)
牛込柳町駅経由小滝橋車庫行き
「国立国際医療研究センター前」下車 徒歩0分

診療時間

外来診療時間 8:30~17:15
初診受付 8:30~11:00

※休診日や完全予約制を設けている診療科もありますので、必ずホームページをご覧ください。

